

年内シフトの高校3年生の「とりあえず大学進学」行動
—交差遅延効果モデルによる2時点間の分析を通して

氏名：中畠 剛
会員番号：C-3758
所属：帝京大学経済学部

四年制大学への進学率が高まり、高卒進路の中で大学進学の実感が増している。入試制度の多様化により、意思決定機会の早期化に伴って、明確な目標がないまま進路を決定する“とりあえず大学進学”の高校3年生の存在が注目されている。本研究では、年内に大学・短期大学（専門学校等を含む）の進路を決定する、いわゆる「年内シフト」の高校3年生の2時点パネルデータを用いた検討を行った。交差遅延効果モデルにより、とりあえず大学進学、自己決定、学校生活満足、友人関係、家族関係、健康、前向き思考、不安感という変数間の相互的な因果関係を分析した。その結果、進路意識との関係では、「とりあえず進学」意識が低下する専門学校進路決定者ほど前向き思考が強まり、決定度との関係では、大学進路決定者ほど「自己決定」が前向き思考に正の影響を与えることが分かった。また、進路選択・決定プロセスを通じた前向き思考の上昇（変化）に対しては、専門学校進路決定者のほうが敏感に反応した。即ち、自分の意思で高卒進路を選択することが、選んだ行動の動機付けと職業ビジョンを明るくする、それが前向き思考を高めることに繋がるのである。生徒本人の思いや気分で大学進路を選択できる状況が発生している昨今、自己決定度の高い人の心理的幸福感が高いということは注目に値する結果といえる。